



シマフクロウの生態 眼

シマフクロウ保護・研究家 山本純郎



瞬膜

着地直前、瞬膜をおろす



右：シロフクロウの頭骨
左：シマフクロウの頭骨
羅白郷土資料館 所蔵

時は下の瞼を上げる。また鳥類には第3の瞼といわれる瞬膜がある。飛行中はこの透明な膜を下ろし 眼の乾燥や異物が入るのを防いでいると言われているが、シマフクロウは飛行中瞬膜をおろさない。フクロウ類の瞬膜は半透明なので、視界がクリアにならないせいかもしれない。もっとも着地する時はたいてい瞬膜を閉じるので、やはり眼の保護のために使っているのだろう。

鳥類の色の識別能力は、かなりの程度あると思われる。美しい羽色は、同種の異性に見せる為のものだ。フクロウ類の場合多くは夜行性で、弱い光を感知する細胞を多く持たねばならず、色を識別する細胞が入りきらない。彼らはモノクロームの世界に生きていられる。しかし完全な夜行性のフクロウはおらず、昼間のハンティングもするので、獲物の識別のために、その能力は少しはあるのかも知れない。

またフクロウ類を含む猛禽類の動体視力はとても優れている。ただし静止しているものを見分けるのは苦手ようだ。私の目撃した2羽のシマフクロウは喧嘩の真最中だったが、1羽が地上に落下し、伏せた状態でじっとしていた。もう1羽は、頭上で必死に探していたが、見つかられず、やがて飛び去っていった。これは網膜には映っていても識別出来なかったのだろう。

鳥類の目は、人のように大きく動かすことが出来ない。特にフクロウ類は骨片(強膜輪)によってしっかりと眼窩に固定されていて全く動かすことが出来ない。シロフクロウは、シマフクロウよりやや小さいが、強膜輪はシマフクロウより長い。これは焦点距離の長い眼をもっていることになる。カメラの望遠レンズと同じで、像を大きく映してくれるのだ。シロフクロウはツンドラ地帯で、獲物を

探し、発見すると飛行しながら追尾して捕らえるので、この目がとても役に立つ。一方シマフクロウは獲物(魚)を追って飛行することは殆どなく、魚が近づいてくるのを待って捕獲することが多い。元は同じ系統のフクロウ達だが、ハンティング方法の違いが眼の構造にも違いをもたらしたと考えられる。鳥類は下の瞼を上げて瞬きをするが、フクロウ類は上の瞼を下げる。だが眠る

事務局便り

● 当会顧問の山本純郎さんが皆さんの質問にお答えします。

普段気になっているシマフクロウのこと、何でも結構です事務局までお寄せください。お待ちしております。

● 入会を募集しています

引続き当会の趣旨にご賛同いただける個人の皆様の入会を募集しております。ホームページからも入会の手続きが可能となっておりますのでご覧ください。

北海道シマフクロウの会 事務局(担当:米谷・廣谷・山内)
〒060-8640 札幌市中央区大通西3丁目11番地 北洋ビル6階 北海道二十一世紀総合研究所 内
TEL 011-231-8681 FAX 011-231-8683 URL:hokkaido-shimafukurou.org

北海道シマフクロウ通信

北海道シマフクロウの会 会報

第13号



飛行中のシマフクロウ 写真：山本純郎



札幌市立円山小学校でシマフクロウについて「学ぶ会」開催

次世代を担う子どもたちに、シマフクロウの保護や生物多様性保全の重要性について理解を深めてもらおうと、平成28年10月4日に円山小学校PTA主催、当会后援による、シマフクロウについて「学ぶ会」を円山小学校にて開催しました。

当日は、まず朝礼で全校生徒が集合、獣医師でもある猛禽類医学研究所（釧路）の渡辺副代表がシマフクロウと同研究所で保護し育てているシマフクロウの“ちび”についてお話ししました。残念ながら、一緒に登場を予定していた“ちび”が体調を崩したため、生徒たちの前には出られませんでした。渡辺先生のわかりやすい説明に、生徒たちは真剣に聞き入っていました。

後半は5、6年生向けに特別授業を行いました。最初に当会の横内会長から「シマフクロウ」の生息数は現在140羽程度でしかなく、絶滅させないよう色々な観点から取り組んでいく必要があることを、次に村田副会長からは、「シマフク

ロウ」が安心して住める環境を作っていくことは、人間にとっても住みやすい環境作りにつながるについてお話ししました。

続いて渡辺先生からは、「生物多様性」についてお話がありました。「シマフクロウ」を例に、<種としての多様性>、<生態系>、<遺伝子の多様性>に関し、生徒たちへの質問を交えながら説明し、生徒たちは元気な声で答えていました。また、生徒たちからも、「動物たちが安心して暮らせるようにするにはどうしたらよいのか?」、「シマフクロウが絶滅す



ると、どんな影響があるのか?」、「シマフクロウ以外に北海道にしかいない動物は何か?」などの質問があり、生物多様性保全の重要性について理解が深まったものと考えます。最後に渡辺先生は、いろいろなことを知り、自分には何ができるかを考えるためには、積極的に“学ぶこと”が大切だということを生徒たちに伝え、学ぶ会は終了しました。

「シマフクロウ」の保護を呼び掛ける当会として、今後も機会をみてこのような「学ぶ会」にも取り組んでいきたいと考えます。 [事務局]



絵本「シマフクロウ ちびのぼうけん」が完成しました

昨年度の定時総会で承認をいただき、制作に取り組んでまいりました絵本が、「シマフクロウ ちびのぼうけん」として12月9日に北海道新聞社より発刊となりました。

この絵本は、会員の綱島氏から提供いただいた原案を基に、原画を地元の意欲ある若手にとの発想で、札幌市立大学の事務局、デザイン学部の上遠野教授の協力を得て、在学生、卒業生の候補者からのコンペティションを実施、選考で選ばれた当時3年生在学の土屋慶花さんをお願いして、1年以上の時間をかけて完成に漕ぎつけたものです。

この絵本には、体に障害を持つシマフクロウのちびと、親代わりに世話をする少女ユキが巡り合った北海道の大自然や四季の変化の豊かさを通じ、次の世代を担う子どもたちへ向け、広く生物多様性保全の大切さに気づいてもらいたいというメッセージが込められています。また、色彩豊かな原画のタッチを生かした、質の高い絵本に仕上がったものと自負して



います。既に会員の皆さまにはお届けしてはいますが、なるべくたくさんのお子に手にしてもらえよう、書店での販売のほか、北洋銀行、同行関連会社の支援をいただいで、小学校や図書館への寄贈も行ないました。会員の皆さまには、機会があればこの絵本を話題にいただき、絵本が伝えたいメッセージを多くの皆さんに知ってもらえようご協力いただければ幸いです。



記者会見の様子

<シマフクロウ四方山話>

3

二風谷・アイヌ文化とシマフクロウ

北海道シマフクロウの会会長
横内 龍三



シマフクロウが、アイヌの人々から「コタンコロカムイ（村を守る神）」と呼ばれ、イオマンテ（動物の神送りの儀式）においても、クマと並んで最高の地位を与えられていたことはよく知られた事実です。函館市立図書館所蔵の明治初期アイヌ風俗図巻には、シマフクロウの神送りの様子を描いた絵（写真1）が収録されています。1983年（昭和58年）弟子屈町・屈斜路コタンで、1908年（明治41年）以来、75年ぶりと言われるコタンコロカムイ・イオマンテが行われたという記録もあります。

平取町二風谷は、北海道に現存する有数のアイヌコタンとして知られております。1878年（明治11年）に蝦夷を旅したイギリスの女性旅行家イザベラ・バ

ードは、その旅行記「日本紀行」の中で、平取のアイヌコタンでの経験やアイヌの風俗について克明な記録を残しました。現代の平取・二風谷については、貝澤正氏の「アイヌわが人生」や萱野茂氏の「アイヌの碑」などの著作で知ることが出来ますが、その「萱野さんちの居候」として大学卒業後14年間、アイヌ語とアイヌ文化を学び、また子供たちを対象としたアイヌ語教室の主宰者を自ら勤められた本田優子札幌大学副学長（北海道シマフクロウの会理事）の著書「二つの風の谷（アイヌコタンでの日々）」からも詳しく知ることが出来ます。この二風谷にある「二風谷アイヌ文化博物館」の入り口には、羽を広げた大きなシマフクロウの像が設置されていて、私たちを出

迎えてくれます（写真2）。シマフクロウの顔が、ひげを蓄えたアイヌ・エカシ（長老）のように見えませんか。

ところで、現在「アイヌ民族博物館」が存在する白老町のポロト湖畔に、2020年（平成32年）の一般公開を目指して「国立アイヌ民族博物館」が建設されることが決まり、開設準備が進められています。博物館や公園などからなるこの新しい施設は、「民族共生象徴空間」と名付けられており、今後、アイヌの歴史・伝統・文化の研究・承継を行うための中心的役割を果たすことになるでしょう。こうした状況に鑑み、シマフクロウの保護活動も一層ピッチを上げなければならないと思う今日この頃です。

